

〈資料紹介〉住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

岩 坪 健

一、はじめに

平成十一年（一九九九）NHK大河ドラマ「元祿繚乱」に関連して、「元祿繚乱展」が開催された際、源氏物語絵が展示された。その年の一月に刊行された図録の解説（榎原悟氏担当）は以下の通りである。

源氏物語図額 住吉具慶 六面

かつて十二図からなっていた『源氏物語画帖』（零本）を額装に改めたもの。土佐派の細密画法によりながらも、淡彩を施した彩色は独特の味わいを深めている。ふっくらとした人形のようなあどけない顔つきも好ましい。図は「花散里」「絵合

「松風」「少女」「蛩」「橋姫」。

図録には右記の六図のみ掲載され、詞書は見られない。また巻末の

「出品目録」には、以下のようにある。

源氏物語図額 住吉具慶 六面 絹本着色 各二一・五×一

八・三

そのうち令和三年（二〇二二）に齋宮歴史博物館にて、令和三年度特別展「齋宮 平安五種競技——弓・馬・鞠・鷹・相撲——」展が開催され、前掲の六図のうち馬の博物館が所蔵する、蛩の巻の詞書と絵が出展された。その図録（二〇二一年一〇月刊行）には絵に描かれた場面の状況説明のあと、次の文章（松田茜氏担当）が続く。本作品は、源氏絵五四帖のうち、一二帖分の残欠を画帖としたものであったが、現在は絵と詞書を組み合わせ額装している。

このように今までは十二帖のうち詞書は一帖（蛩の巻）、絵は蛩の巻を含め六帖しか知られていなかったが今回、御所蔵者の御好意

により十二帖の絵と四帖の詞書を拝見することができた。絵は前掲の六帖のほか桐壺・帚木・薄雲・朝顔・常夏・藤袴の六帖、詞書は花散里・絵合・蛭・橋姫の四帖である。現存する巻々を物語の順に並び替えると、次のようになる。なお各巻の頭に付けた洋数字は帖数である。

1 桐壺、2 帚木、11 花散里、17 絵合、18 松風、19 薄雲、20 朝顔、21 少女、25 蛭、26 常夏、30 藤袴、45 橋姫。

連続する巻々がある一方、宇治十帖は一帖しかなく、この十二帖が残存した経緯は推測しがたい。なお全図を末尾に掲載する。

二、成立時期

画帖であったときは詞書筆者の極札が付いていたようで、蛭の巻の現在は、「蛭 實相院大僧正義尊」と墨書された小短冊が額縁の裏側に貼られている。そのほか花散里の巻は「曼殊院良想法親王」、絵合の巻は「圓満院大僧正常尊」、橋姫の巻は「中院中納言通純」である旨、御所藏者から伺った。その四人を生年順に並べて略歴を記す。

○良想法親王。曼殊院門跡。生没一五七四～一六四三年。父は誠仁親王、母は新上東門院（勸修寺晴子）。一五八七年に曼殊院に入室、翌年に親王宣下を受け、同年に得度。

〔資料紹介〕住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

○義尊。実相院門跡。生没一六〇一～一六六一年。祖父は將軍足利義昭、父は足利高山（大乘院門跡義尋）、母は古市胤子（後陽成天皇女房）。寛永年間（一六二四～一六四四）に実相院を相続して亡くなるまで務めた。

○常尊。円満院門跡。生没一六〇四～一六七一年。義尊の弟。幼少より円満院に入室。

○中院通純。生没一六一二～一六五三年。中納言在職期間は一六三七年一月一日から一六四六年三月三日で、翌年の一二月には大納言に就任した。

以上により本作品の成立時期は、中院通純が中納言に就任した一六三七年一月一日から、良想法親王が亡くなった一六四三年七月一日までとなる。

現存する十二図すべてに白文方印の印章「廣純」が、右下隅か左下隅に押されている。広純は住吉具慶（生没一六三一～一七〇五年）の初名で、後に広澄と名乗り、延宝二年（一六七四）五月に剃髪・得度して法名を具慶と号し、同年六月法橋に叙せられた。よって本画帖の成立は、出家した一六七四年より前と考えられる。先に詞書執筆者の官職と生没年から本作品の成立時期を一六三七～四三年としたが、具慶はまだ数え七～十三歳となり不自然である。蛭の巻の極札は薄紅色の短冊形の小札に記されているだけで、「琴山」

のような極印はない。おそらく後世の人が鑑定したため、このような不具合が生じたのであろう。

広純時代の作例として、「源氏物語絵巻」五巻が挙げられる。堺市博物館の図録「源氏物語の絵画」（一九八六年一〇月）には、次のように解説されている。

源氏物語五十四帖の各帖一場面を絵画化しそれに靈元天皇以下五十四人の堂上人が各帖の詞書を寄合書した大作。絵の筆者具慶は住吉派画人として最初の御用絵師となった人物である。彼は早くから禁裡絵師としても活動しており、第5巻末尾に「広純」の款記・印章があるところから、比較的若い時期、寛文（一六六一～七三年）頃の制作が堂上人の官位・生没年との関連からも予想出来る。各場面は東京芸術大学所蔵住吉家粉本中「源氏物語画帖集」に多数見い出せ、住吉派源氏絵のあり様を考える上で中心的な作品といえよう。

この作品は仙台伊達家旧蔵で現在はMIHO MUSEUMに所蔵され、制作年代は寛文十年～延宝二年（一六七〇～一六七四）と推定されている^①。下原美保氏の調査によると、具慶の源氏絵は四組の「源氏物語絵巻」（前掲のと。個人蔵・MOA美術館蔵・*東京国立博物館蔵）のほか、「源氏物語図屏風」（根津美術館蔵）、「源氏物語 朧月夜の君図」一幅（個人蔵）と、小稿で取り上げた「源氏物語図

額」が伝来し、*を付けた四作品はすべて、延宝二年～元禄四年（一六七四～九一）の制作と見られている^②。このほか「廣澄」（白文方印）が捺された「源氏物語画帖」（石山寺蔵）も現存する。^③

三、詞書の本文系統

管見に及んだ詞書は11花散里・17絵合・25螢・45橋姫の四帖であり、以下に全文を翻刻する。改行の箇所は／で示し、旧字体の漢字は新字体に直す。末尾の（ ）内に「源氏物語大成 校異篇」（『大成』と略称す）の頁と行数、新編日本古典文学全集（略称・新編全集）の冊数と頁を示す。次いで『大成』を用いて、詞書の本文系統を調べる。なお古文に付けた傍線は稿者による。

花ちるさと／をち帰りえそ忍はれぬ時鳥／ほのかたらひし宿のかきねに／さきくも／聞し／声なれば／こはつくりけしき／とりて御せうそこ／聞ゆわかやかなる／けしきとも／しておほ／めく／なるへし（三八八頁5行）（②一五四頁）

「宿のかきねに」と「さきくも」の間に『大成』所収の全本には、「寝殿とおほしき屋の西のつまに人々ありたり。」（本文は新編全集による）という一文があるが、詞書は省いたとみれば『大成』の底本と同文である。ちなみに河内本系統の全本は傍線を引いた箇所が「かきねを」「き、しる声なりければ」「御せうそこいふ」「けはひと

もあまたして」であるので、詞書本文は河内本ではない。

絵合／左はしたんのはこすわうの花そく／しき物にはむらさきのから錦／うちしきはゑひそめのきなり／わらは六人あか色にさくらかさね／のかさみあこめはくれなゐにふち／かさねのおり物なりすかたよいいな／となへてならすみゆ（五六九頁一行）（②三八五頁）

傍線を付けた箇所は本文の異同が見られ、『大成』の底本は「左はしたものはこに」「からのしき」「えひそめのからのきなり」であり、河内本系統の一本のみが「からのしき」である以外は底本と同様ではない。ことによると詞書の筆者は、「に」「の」「からの」を書き落としたのかもしれない。

蛭／ひつしの時はかりにむま／はのおと、にいて給て／けにみこたちおはしつとひ／たりてつかひともおほや／けことにはさまかはりてすけ／たちかきつれまいりてさま／ことにいまめかしくあそひくらし給（八一三頁五行）（③二〇六頁）

詞書の一重傍線部「時はかりに」「てつかひとも」と一致するのは青表紙本系統の肖柏本と河内本系統全本で、ほかの伝本は『大成』底本と同じ「時に」「てつかひの」である。その一方、河内本系統は二重傍線部が「いて給へり」「みこたちなとおはしましつとひたり」「肖柏本も「いて給へり」である。よって詞書本文は肖柏本に

〈資料紹介〉住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

近い青表紙本系統と言えよう。

橋姫／琵琶をまへにをきてはちを手／まさくりにしつ、あたるに雲かく／れたりつる月のはかにいとあかく／さしいてたれは扇ならてこれして／も月はまねきつへかりけりとて／さしのそきたるかほいみしくらうた／けに、ほひやかなるへし（二五二三頁二行）（⑤一三九頁）

この箇所は青表紙本系統と河内本系統で大きな異同はない。詞書の執筆者は巻により異なり、各自が自分の手沢本を用いたのであれば本文の系統は巻ごとに異なる。とはいえ何れの巻も青表紙本系統内に収まると見てよからう。

四、場面の解説

以下、全十二図を巻の順に考察する。

1 桐壺。源氏の元服の場面（新編全集①四五頁）。本図における主要人物の配置を左右反転させた構図を取るのが、住吉如慶筆「源氏物語画帖」（一六五二―六三年、サントリー美術館蔵）である。たとえば帝から見て源氏は本図では右側、サントリー美術館本では左側に控えている。また、よく似た図が伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」（十七世紀、九曜文庫蔵）^④にあり、その絵の解説（中野幸一氏担当）は以下の通りである。

画面は、源氏元服の場面。清涼殿の東の廂の間、御簾の中の東向きの御椅子に座っておられるのが桐壺帝。向って右の畳上に束帯装束で泰然と控えているのは加冠役の左大臣。左には源氏がまだみずらを結った童姿で神妙に座っている。その前に下襲の裾を長く曳き、深々と拝礼して理髪の箱をおしただいているのが理髪役の大藏卿。南の孫廂には束帯装束に正装した公卿たちが居並び、簀子には武官装束の官人の姿も見える。元服の儀の厳肅な雰囲気が漂う中に、童姿の源氏の愛らしさが一きわ目を惹く。

源氏と左大臣の向きに注目すると、本図とサントリー美術館本では向かい合っているが、九曜文庫本では左大臣は源氏の横顔しか見えない。それに伴い、大藏卿の体の向きも異なる。左大臣から見て九曜文庫本は大藏卿の横顔が見えるのに対して、本図とサントリー美術館本は背中が見えている。

また大藏卿の下襲の裾に注目すると、九曜文庫本はほぼ真直ぐであるのに対して、本図とサントリー美術館本は直角に曲がっている。これはまず帝に拝礼した後、体の向きを九十度回転して源氏と対面したが、裾の末はそのまま動かなかったからと推測される。というのは大藏卿が理髪の手を両手に持ったまま帝に拝礼している図があり、以下に列挙する。

- (1) 土佐光吉筆「源氏物語手鑑」(二六二二年、和泉市久保惣記念美術館蔵)。当館編『土佐派源氏絵研究』(二〇二〇年)所収。
 - (2) 伝土佐光吉筆「源氏物語図屏風」(桃山時代、出光美術館)。
 - (3) 土佐光則筆「源氏物語画帖」(十七世紀、任天堂蔵)。
 - (4) 伝土佐光起筆「源氏物語画帖」(根津美術館蔵)。⁵⁾
 - (5) 土佐派「源氏物語色紙絵」(江戸時代初期、堺市博物館蔵)。⁶⁾
 - (6) 土佐派「源氏物語色紙貼交屏風」(江戸時代前期、和泉市久保惣記念美術館蔵)。当館編『土佐派源氏絵研究』(二〇二〇年)所収。
 - (7) 伝住吉如慶筆「白描扇面源氏物語画帖」(大阪青山歴史文学博物館蔵)。
 - (8) 中野幸一編「源氏物語画帖・石山寺蔵・四百画面」(江戸時代中期、勉誠出版、二〇〇五年)。
 - (9) 「源氏物語色紙」(江戸時代中期頃、同志社大学文化情報学部蔵)。⁷⁾
- このうち左大臣が描かれているのは(7)と(8)のみで、他の作品では御簾か壁に遮られたためか姿は見えない。(7)は本図と同じく源氏と左大臣は向かい合っているが、立ち位置が本図とは逆で帝から見て左側に源氏が座る。一方(8)の源氏は、左大臣の横に座っている。このほか左大臣の代わりに女性が控える図もある(「源氏物語図屏風」

江戸時代、奈良大学蔵など。^⑧

この場面は既に室町時代の扇面屏風（浄土寺・藤岡家・永青文庫本）に描かれているが、いずれの図にも理髪の箱は見当たらない。

箱の代りに黒い猫足の台のような物が見える図（土佐光信筆「源氏物語画帖」一五〇九年、ハーバード大学美術館蔵、祝詞を両手で持ち読み上げている図（「源氏物語絵巻」十七世紀初頭、毛利博物館蔵。桐壺の巻の表紙絵、一六一五年頃、バイエルン州立図書館蔵。「源氏物語図屏風」十八世紀、ウィーン国立工芸美術館蔵。「源氏物語絵屏風」国文学研究資料館蔵）、冠を捧げ持つ図（「源氏物語絵屏風」国文学研究資料館蔵）のほか、酒を賜わる図（「源氏物語色紙」桃山〜江戸時代、奈良大学蔵）や、源氏が桐壺帝と並ぶ図（「源氏物語画帖」十七世紀、石川県立美術館蔵。「源氏物語図屏風」江戸時代前期、斎宮歴史博物館蔵。狩野派「源氏物語図屏風」江戸時代前期、彦根城博物館蔵）もある。

2帚木。木枯しの女の家で、殿上人が笛を吹く。（①七八頁）。よく絵画されるため、バリエーションが多い。本図は⑦琴を弾く女性が見え、④殿上人は簀子に座り、⑤杵を脱いでいない。その三条件をすべて満たすのは意外に少なく、住吉家粉本「源氏物語画帖集」（東京藝術大学美術館蔵）、「白描源氏物語画帖」（十七世紀末〜十八世紀初、名古屋博物館蔵）^⑨などである。⑦を外して④と⑤の

〔資料紹介〕住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

みならば土佐光吉筆「源氏物語手鑑」（一六一二年、和泉市久保惣記念美術館蔵）、殿上人は庭に立ち⑦と⑧に合うのは伝住吉如慶筆「源氏物語画帖」（個人蔵）^⑩と伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」（九曜文庫蔵）である。このほか両足とも杵を脱ぐ図もあれば、片足だけ脱ぐものもある。前者は土佐光吉筆「源氏物語画帖」（桃山時代、京都国立博物館蔵。「源氏物語画帖」（勉誠社、一九九七年）所収）など、後者は前掲の土佐派「源氏物語色紙貼交屏風」、土佐光則筆「源氏物語画帖」任天堂蔵、伝住吉如慶筆「白描扇面源氏物語画帖」大阪青山歴史文学博物館蔵などである。

11花散里。車内の源氏、昔の恋人が弾く琴の音を聞き、惟光を使わせる（②一五四頁）。本図とは逆に源氏が乗る牛車を画面の下部に、女性たちを上部に配置する方が多い（住吉家粉本「源氏物語画帖集」等）。本図と構図が似るのは住吉具慶筆「源氏物語絵巻」（MIHO MUSEUM蔵）である。

17絵合。冷泉帝の御前での絵合（②三八五頁）。絵合は二回催され一回目は藤壺、二回目は冷泉帝の御前で開かれた。一回目は女性のみ、二回目は男性も参加したので両者は区別できるはずであるが、源氏絵では判然としないものが多い。それは「二度の絵合を一回の催しであるかのように要約」した梗概書によったからかもしれない。本図は御簾の中に帝しか座らない纏緇縁が置かれていることから、

二回目と分かる。帝の左右にいるのは梅壺女御と弘徽殿女御、あるいは裳を付けているので帝に仕える女房であろうか。左方は赤系統、右方は青系統と物語に記されているので、絵を収めた箱の下に敷く打敷で赤い方が源氏側、青いのが権中納言側であり、御簾に最も近いのは判者を務めた帥宮と考えられる。右方の女房たちが絵巻物を広げるか巻いているので、御前に広げられているのは左方の絵であろう。この場面はよく描かれるが、構図が同じものは未だ見当たらない。住吉如慶筆「源氏物語画帖」（サントリ―美術館蔵）は人物の配置が本図とは逆で、帝と二人の女性を画面右下に、公卿・女房たちを画面左上に置く。

18松風。源氏、桂の院にて小鷹狩の若殿たちを饗応する（②四一八頁）。物語によると敦負の尉（②四一七頁）、頭中将と兵衛督（②四一八頁）、左大弁や舍人（②四二二頁）などが参加していた。本図で源氏と少年を除く八人の男性がかぶる物に着目すると立烏帽子が二人、風折烏帽子が六人いる。身分が高い者は立烏帽子をつけるので頭中将、兵衛督が左大弁（いずれも従四位相当）であろう。風折烏帽子の一人は腕に隼はやぶさを留まらせている。源氏は幔幕を背にして坐り、前には盃を置いた三方台が置かれて饗宴を意味する。画面左上には大堰川が流れ、蛇籠と杭が見られる。杭は冬に魚を獲る網代の一部で、今は秋なので手入れされざれ放置されたままである。画面

下部には萩や桔梗、薄など秋の草花が、源氏の後ろには巻名に合う松が描かれている。本図と酷似するのは住吉如慶筆「源氏物語画帖」（一六六三―六六年、大英図書館蔵）で、相違点は少年の代わりに立烏帽子の狩衣姿になっていることである。

「源氏絵詞」（京都大学蔵）に「川 男男御 男小鳥壺の枝に差て持 皆平砂二座」とあり、本図も全員が屋外にいる。全員が屋内にいる図や、源氏たち一部は室内にいて他は庭にいるものもあるが、皆が外にいる作例が最も多い。その例は夙に、土佐光信筆「源氏物語画帖」（一五〇九年、ハーバード大学美術館蔵）に見られ、萩の枝を持つ男が画面の左方から源氏に差し出す点も本図と共通する。さらに住吉家粉本「源氏物語画帖」では、源氏と供人たちの配置も共通する。しかし本図とは逆に、画面左上に源氏を置いて右方から小鳥を捧げる構図の方が多く、古くは土佐光吉筆「源氏物語画帖」（桃山時代、京都国立博物館蔵）、土佐光吉筆「源氏物語手鑑」（一六一二年、和泉市久保物記念美術館蔵）、伝土佐光吉筆「源氏物語図屏風」（桃山時代・十七世紀、出光美術館蔵）に見られる。これは絵巻物のように視点を右から左に動かすと、最後に源氏が鎮座する方が安定するからであろうか。

19薄雲。明石の君、姫君を手放す（②四三三頁）。この場面もよく採られるが、本図が選定した箇所は珍しい。物語本文では、

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、^ア母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいつくくして、^イ袖をとらへて「乗りたまへ」と引くもいみじうおぼえて、

とあり、傍線アを選ぶ例が多く、本図のように傍線イを採る例は珍しい。また車内にいる源氏を描くのも稀で、そのうえ顔が隠れるようにしたことにより、母と娘の別れに焦点が絞られている。この源氏の描き方は、住吉家粉本「源氏物語画帖」にも見られる。

20朝顔。源氏、女性関係について紫の上に語る(②四九〇頁)。全体の構図、および水辺の松と池に映る月は、「源氏物語図色紙」(堺市博物館蔵)に似る。大きな雪玉の傍に三人がいて、離れて小さい雪玉を一人が持つ図様は住吉家粉本「源氏物語画帖」のほか、伝土佐光吉筆「源氏物語図屏風」(桃山時代・十七世紀、出光美術館蔵)、土佐光則筆「源氏物語画帖」(任天堂蔵)、土佐派「源氏物語色紙貼交屏風」(和泉市久保惣記念美術館蔵)、住吉如慶筆「源氏物語画帖」(サントリ美術館蔵)に見られる。本図を左右反転すると、住吉如慶筆「源氏物語画帖」(大英図書館蔵)になる。

21少女。梅壺中宮、紫の上に紅葉などを贈る(③八一頁)。室町時代の「源氏物語図扇面散屏風」(浄土寺蔵)以来、使いの童女は紫の上たちに向かつて直進するように描かれている。ところが本図で

〈資料紹介〉住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

は、両者が平行に配置されている点が独特である。その点が共通するのは、伝住吉如慶筆「源氏物語画帖」(白鶴美術館蔵)である。

25蚩。源氏、六条院にある「馬場殿」^{むまばおとど}にて競馬を催す(③二〇五頁)。前を走る騎手が振り向く様は、土佐光吉筆「源氏物語手鑑」(和泉市久保惣記念美術館蔵)や伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」(九曜文庫蔵)、伝住吉如慶筆「白描扇面源氏物語画帖」(大阪青山歴史文学博物館蔵)に似る。本図では見物人が多いが、他図では画面の片隅に数人しかいない。また馬場の柵は他図では水平か緩やかな曲線であるのに対して、本図は右上から左下へと鋭角に描くことにより馬の速さを強調している点が独自である。

26常夏。源氏、釣殿にて涼を取る(③二二三頁)。物語本文に「西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調べてみらす。」とあるが、調理する人も描くのは少数で住吉家粉本「源氏物語画帖」のほか、住吉如慶筆「源氏物語画帖」(一六六三〜七〇年、大阪青山歴史文化博物館蔵。サントリ美術館蔵。大英図書館蔵)、伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」(九曜文庫蔵)、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」(九曜文庫蔵)¹³、「源氏物語画帖」(十七世紀後半、個人蔵)¹⁴などに見られ、調理人の手さはきまで本図に似る。30藤袴。夕霧、持っていた藤袴を玉鬘に差し出す(③三三三頁)。藤袴を持っているのは夕霧が多く、本図のように玉鬘が手にしてい

るのは珍しい。物語では夕霧は簾の外にいて、「¹夕霧は藤袴を御簾のつまよりさし入れて（中略）」とみにもゆるさで持たまへれば、²（玉鬘が）うつたへに思ひもよらで取りたまふ御袖を（夕霧は）引き動かしたり。（同頁）とあるので、藤袴をどちらが持っていて本文に合う。作品の多くは傍線1の箇所を描くが、本図は傍線2を選んだことになる。

また物語では傍線1にある通り、夕霧は藤袴を持った手だけ簾の中に入れていますが、本図の夕霧は室内に入りこんでいて、この作例は以下の作品にも見られる。伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵）、住吉如慶筆「源氏物語画帖」（十七世紀、石山寺蔵。大阪青山歴史文学博物館蔵。サントリー美術館蔵。大英図書館蔵）、伝住吉如慶筆「白描源氏物語扇面画帖」（大阪青山歴史文学博物館蔵）、住吉具慶筆「源氏物語絵巻」（MIHO MUSEUM蔵¹⁵）、伝土佐光起筆「白描源氏物語色紙絵」（同志社大学蔵¹⁶）、「白描源氏物語画帖」（十七世紀末～十八世紀初、名古屋博物館蔵）。物語では二人とも喪に服して本図もそのように描くが、喪服ではない作例も珍しい（前掲の伝土佐光信筆など）。

45橋姫。薫は八の宮不在の宮邸を訪れ、八の宮の娘である大君と中の君の合奏を隠れて立ち聞きして垣間見る（⑤一三九頁）。当巻を代表する名場面で、作例は国宝「源氏物語絵巻」をはじめ数多い。

物語本文の「（薫は）透垣の戸を、すこし押し開けて見たまへば」、「内なる人、一人は柱にすこし隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝみたるに」（⑤一三九頁）の箇所は本図の絵と合う。それに対して、「添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて」（同頁）は、琴の上に前かがみになっていると解釈されるが、本図の琴は横に置かれている。国宝「源氏物語絵巻」は物語本文の通りであり、琴を横に置くのは狩野探幽筆「源氏物語図屏風」（一六四二年、宮内庁三の丸尚蔵館蔵）、住吉如慶筆「源氏物語画帖」（大英図書館蔵）である。住吉具慶筆「源氏物語絵巻」（MIHO MUSEUM蔵）のように琴を弾いている場合は琴を見落とすことはなからうが、演奏せずに横に置くと壁や襖などに紛れてしまうからか、琴を描かない作例も散見される。住吉家粉本「源氏物語画帖」には琴を前、横、描かずの三通りの図を収める。

五、終わりに

計十二図を概観すると、どの図も場面は以前から選ばれてきたものばかりである。また1桐壺と20朝顔は住吉如慶の作品を左右反転したものであり、18松風は如慶の図に酷似している。それに対して描き方が稀な例も見られる。例えば17総合と25蛸は構図が珍しく、19薄雲と30藤袴は物語本文と照合すると従来の場面選択とは少しず

れている。本作品が住吉具慶筆であるとすると、父如慶の手法を継承するに留まらず、旧来の名場面に工夫を凝らした点が見られる。すなわち伝統を踏まえつつ革新を取り入れた、意欲的な名品といえよう。

注

- ① 榊原悟氏「住吉派『源氏絵』解題——附諸本詞書——」、『サントリ美術館論集』三三号、一九八九年二月。
- ② 下原美保氏「住吉派研究」一四四頁、藝華書院、二〇一七年四月。
- ③ 大本山石山寺『石山寺の美 観音・紫式部・源氏物語』（二〇〇八年一月）、和泉市久保物記念美術館『土佐派と住吉派 其の二』（二〇二一年九月）等に掲載。
- ④ 中野幸一編『源氏物語扇面画帖・九曜文庫蔵』（勉誠出版、二〇〇七年）に全図が収められている。同氏の解説に、本画帖が「源氏物語歌絵帖」（元禄年間（一六八八〜一七〇四）頃、チェスター・ピーティ・ライブラリ蔵）と「ほとんど同場面同図柄」と指摘されていて、桐壺の巻も同図である。
- ⑤ 本画帖の絵は土佐光起筆と伝承されているが、榊原悟氏は、「画風より少なくとも二手に分かれ」、桐壺の巻を含むグループは「正統的な土佐派の画風に近く、おそらくは土佐光則の周辺にいた次の世代の画家か誰か、とみて間違いないだろう。」と推測された（注①の論文）。たしかに根津美術館蔵の桐壺の巻は、土佐光則筆「源氏物語画帖」（任天堂蔵）に酷似している。
- ⑥ 当図は「源氏物語の絵画」（堺市博物館、一九八六年）に掲載され、

〈資料紹介〉住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

「源氏物語絵巻 住吉具慶筆 五巻」と記されている。それはMIHO MUSEUM所蔵のものと思われるが、MIHO MUSEUM本の桐壺の巻は別の場面である。この図は土佐派「源氏物語色紙絵」（江戸時代初期、堺市博物館蔵）と判断した。

- ⑦ 福田智子氏「同志社大学文化情報学部蔵「奈良絵源氏物語色紙」の紹介（一）」、『社会科学』第五二巻第四号、二〇一三年二月。
- ⑧ 塩出貴美子氏「奈良大学所蔵『源氏物語図屏風』考——図様の継承・借用・変容をめぐって——」、『総合研究所報』二〇、二〇一二年三月。
- ⑨ 藤田紗樹氏「近世前期における白描物語絵制作の様相——名古屋市博物館蔵「白描源氏物語画帖」と「伊勢物語手鑑」の制作をめぐって——」（『名古屋博物館研究紀要』四四、二〇一二年三月）に全図を掲載。
- ⑩ 『実用特選シリーズ 見ながら読む日本のこころ 源氏物語』（学研、一九八七年一月）、『ビジュアル選書 源氏物語絵巻』（新人物往来社、二〇一一年四月）に全図を掲載。
- ⑪ 今西祐一郎氏「土佐光吉画・後陽成天皇^他書 京都国立博物館所蔵源氏物語画帖 詞書翻字・図様解説」、勉誠社、一九九七年四月。
- ⑫ 伊井春樹氏「源氏綱目 付源氏絵詞」桜楓社、一九八三年。
- ⑬ 『見る・知る・読む 源氏物語』（勉誠出版、二〇一三年）に全図を掲載。
- ⑭ 三浦敬任氏「個人蔵「源氏物語画帖」について」（『奈良県立美術館紀要』三五、二〇二二年三月）に全図を掲載。
- ⑮ 詞書は巻の順であるが、絵は25巻と30藤袴のほか、19薄雲と20朝顔もそれぞれ入れ替わっている。
- ⑯ 小稿「土佐光起筆「白描源氏物語色紙絵」（同志社大学所蔵）」の紹介（『社会科学』第五二巻第四号、二〇一三年二月）に全図を掲載。

〔資料紹介〕住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

二七六

〔付記〕

末尾ながら、御指導を仰ぎました榎原悟先生に深謝いたします。

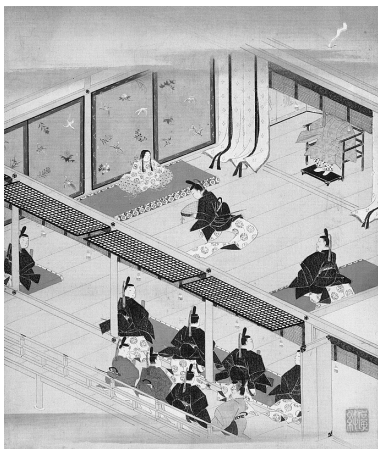
また、貴重な資料の閲覧・掲載を許可してくださいました馬の博物館、その手続きにお世話になりました柏崎諒氏（当館学芸員）に厚く御礼申し上げます。

また、石川県立美術館・石山寺・大阪青山歴史文学博物館・サントリー美術館・東京藝術大学大学美術館・根津美術館・MIHO MUSEUM（五十音順）御所蔵の貴重書も拝見させていただきました。この場を借りまして深く感謝いたします。

脱稿後、住吉派「源氏物語画帖」（江戸時代中期、ブダベスト工芸美術館蔵。『秘蔵日本美術大観』11所収、講談社、一九九四年五月）を住吉具慶筆「源氏物語図額」と比較したところ、同じ場面を描いたものが五図あり、そのうちの三図（花散里・藤袴・橘姫）は似ている。とりわけ30藤袴の巻は酷似するが、藤袴を手にはしているのは夕霧である。

本稿は、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究（二〇二二～二〇二四年度）、科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二二年度）における研究の一部であり、また同志社大学宮廷文化研究センターの事業の一環である。

1 桐壺

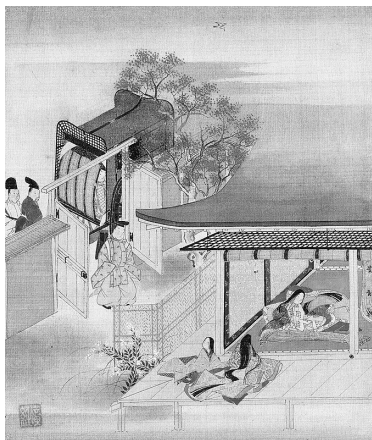
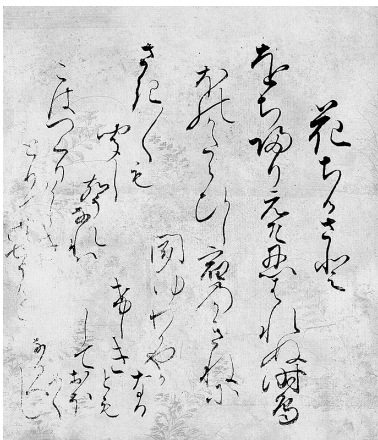


2 帯木

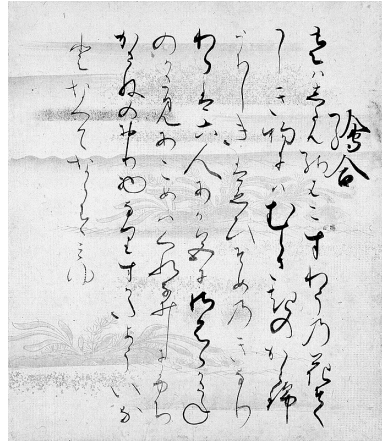
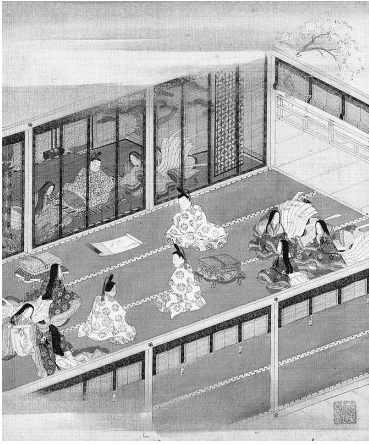


〈資料紹介〉住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介

11 花散里



二七七



17 絵合

〔資料紹介 住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介〕



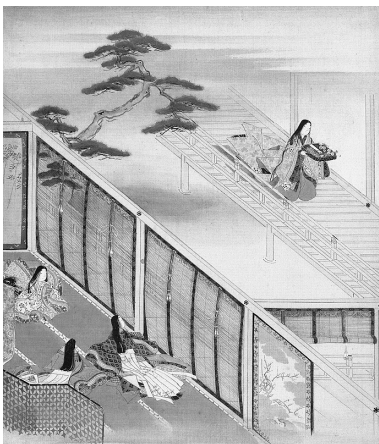
19 薄雲



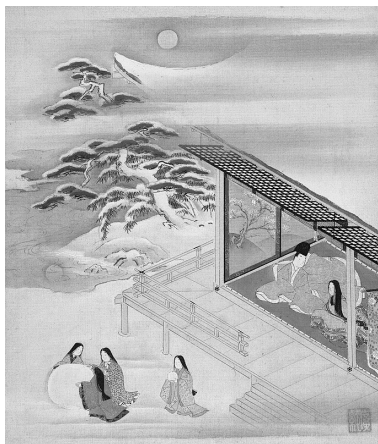
18 松風

二七八

〈資料紹介〉住吉具慶筆「源氏物語図額」の紹介



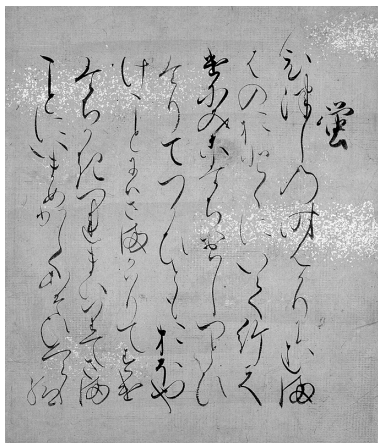
21 少女



20 朝顔



二七九



25 螢 (馬の博物館蔵)

〔資料紹介 住吉具慶筆「源氏物語図巻」の紹介〕

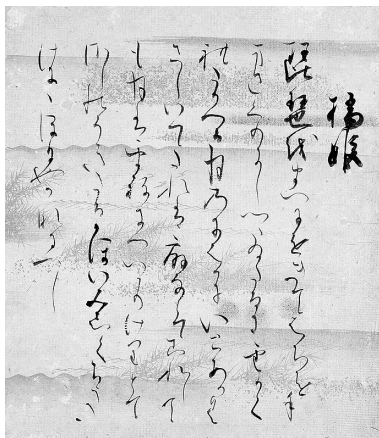
26 常夏



30 藤袴



45 橋姫



二八〇